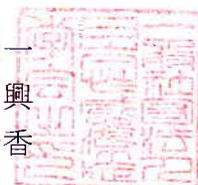


日本周産期・新生児医学会
海野 信也 理事長殿

2016年4月1日

一般社団法人日本性感染症学会

理事長 荒川創一
梅毒委員会委員長 石地尚興
教育啓発委員会委員長 白井千香



梅毒の流行に関する注意喚起について

近年、本邦において梅毒患者報告数の急激な増加がみられています。2014年の報告数は1661名（早期顕症梅毒957，晚期顕症梅毒81，無症候性梅毒613，先天梅毒10）（<http://www.nih.go.jp/niid/ja/survei/2085-idwr/ydata/5673-report-ja2014-30.html>）と2010年の621名と比べ3倍近くに、2012年の875名と比べると1.9倍となっています。2015年報告数は2692名〔暫定値〕（早期顕症梅毒1756，晚期顕症梅毒91，無症候性梅毒832，先天梅毒13）と2014年と比べ1.6倍とやはり急増を続けております。別添として、国立感染症研究所の最新グラフデータをお示しします。厚生労働省のサイトでは梅毒に関するQ&Aというページを立ち上げ注意喚起を促していますが、各種医療機関での適切な診断と治療が最も重要と考えられます。

性・年代別には、2010年から13年は男性患者の増加が顕著で、特定のコミュニティにおけるMSM（men who have sex with men）間での伝播が主な原因とされてきましたが、2014年には男性の異性間感染の増加に伴い、若年女性の報告数が明らかに増加し、2015年には2010年と比べ約5倍と激増しています（http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekka-ku-kansenshou/seikansenshou/dl/leaf03.pdf）。

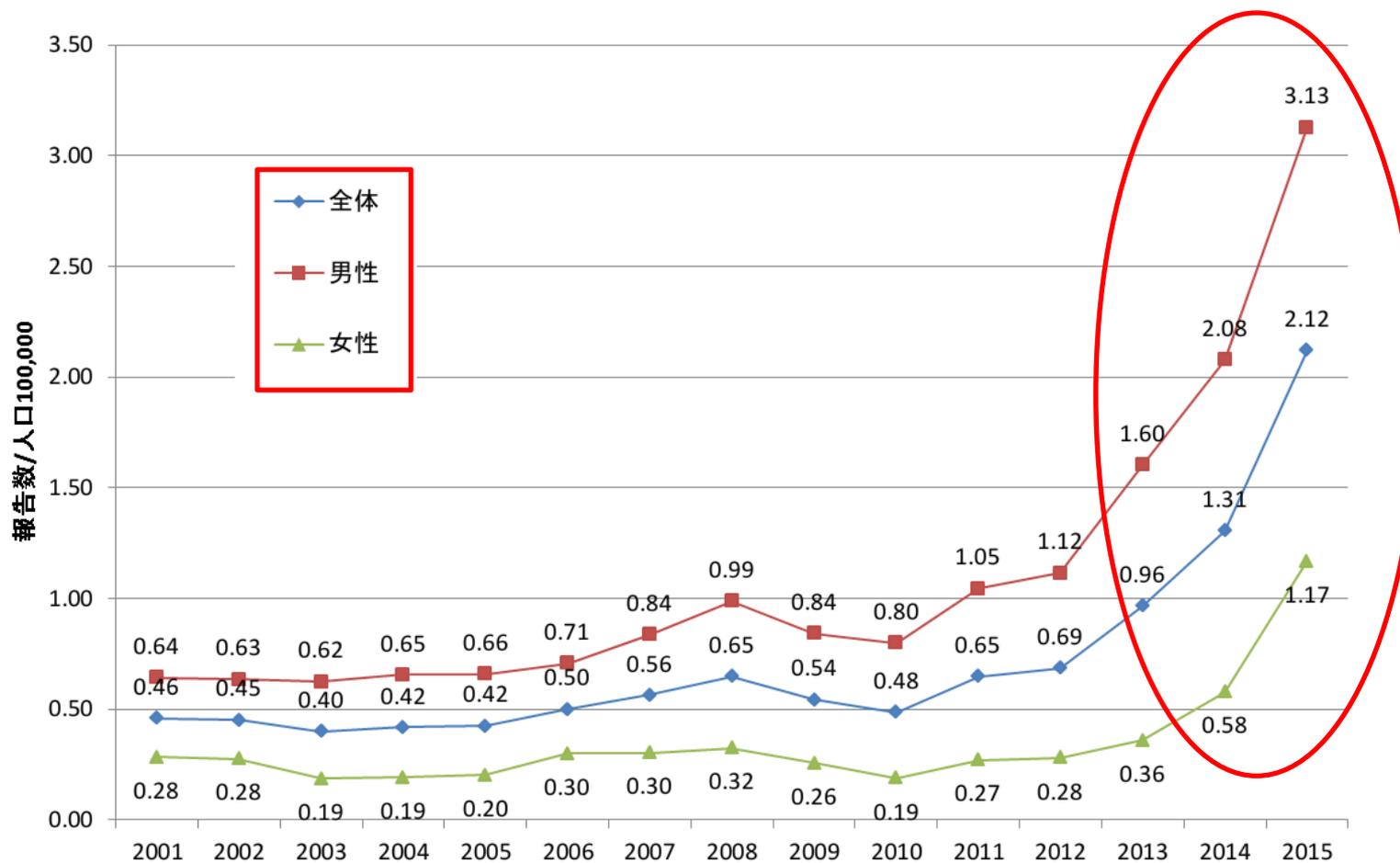
先天梅毒の症例も近年みられるようになってきました。女性罹患の増加に伴う先天梅毒の増加傾向は近年米国において報告されています。今後も先天梅毒を含む梅毒全体の増加が続く恐れがあり、早い段階での対応が必要です。

梅毒の症状は多彩であり、病期によって異なることから、患者はいろいろな主訴でいろいろな診療科を受診する可能性があります。また、血清反応で感染が見つかる無症候性梅毒も増加しています。各病期で適切な診断により早期治療を施し完治させることが重要であり、そのことが感染拡大を食い止めることに繋がります。

是非、貴学会におかれましても、会員の先生方に梅毒の早期発見、早期診断について、注意喚起をお願いいたしたく存じます。

別添

梅毒：人口10万当たり報告数の推移



2011年以降、男女とも急増